

Interview

カステラーニ＝アンドリアッチョ・デュオ

～ギターデュオの遺産について語る～ インタビュアー：テレーズ・ワシリー・サバ

The Castellani-Andriaccio Duo - Discuss Their Legacy for Guitar Duos / An Interview by Thérèse Wassily Saba

翻訳：渡邊弘文



ジョアン・カステラーニとマイケル・アンドリアッチョによるギターデュオは、結成から50年以上を数えるクラシックギター界で最も長い歴史を持つデュオである。彼らはデュオであると同時に夫婦でもあり、演奏活動と結婚生活を現在に至るまで両立させて大きな成功を収めてきた。

カステラーニ＝アンドリアッチョ・デュオはカナダ国境近く、トロントからそう遠くないアメリカ合衆国の都市であるニューヨーク州バッファローを拠点としている。共にニューヨーク州立大学バッファロー校で学び、長年にわたって同校の教授も務めた。

二人はデュオ結成直後の1975年にトロントで開催された「ギター75」フェスティバルでデビューを果たし、その後は、ニューヨークのカーネギーホールやワシントンDCのジョン・F・ケネディ舞台芸術センター、ホワイトハウスなど、世界各地の一流ホールで演奏を行ってきた。彼らの活動は多岐にわたり、多忙な演奏と指導の他にバッファロー・フィルハーモニック・オーケストラとウエスト・ニューヨーク公共放送協会が主催するジョアン・ファレッタ国際ギター協奏曲コンクールの芸術監督も務めている。

また、彼らが1996年に設立したレコード会社フレウ・デ・ソン・クラシックスは、現代音楽の素晴らしいカタログを描いており、録音される機会の少ないレパートリーの初録音も数多く行なっている。プエルトリコの作曲家ロベルト・シエラは彼らのために《オブ・ディスカバリーズ》と《ファンタジア・コレッリアーナ》という2つの協奏曲を作曲している。彼らがイスラエル室内管弦楽団と共に行なった《ファンタジア・コレッリアーナ》の初演とピアノ

ラ《ダブル・コンチェルト》を収録したCDは、『ファンファーレ』誌と『アメリカン・レコード・ガイド』誌で年間優秀盤に選ばれた。

筆者はコロナ禍以前にカステラーニ＝アンドリアッチョ・デュオと共に国際ギターコンクールの審査員を務めたことがあるが、彼らの高いプロ意識とレパートリーに対する深い知識と理解、そして演奏について、何が足りていて、何が足りないのかという、音楽的な本質を即座に見極める審美眼には敬服した。音楽表現と作曲家の意図を伝えることは、すべての音楽活動において最も重要なことである。彼らはギタリストからだけではなく、クリーブランド弦楽四重奏団やブダペスト弦楽四重奏団などの著名な弦楽四重奏団に所属する弦楽器奏者からも音楽的な指導を受けることによって、そうした感覚を培ったのだ。

カステラーニ＝アンドリアッチョ・デュオは「共有の精神」を常に活動の中心に据えている。すなわち、コンサートでは観客と音楽を共有し、指導においては生徒と知識を共有し、自ら主宰するレコード会社を通じて最先端の現代音楽と音楽家の発見を我々と共有しているのだ。

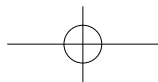
それに加えて、彼らが長年にわたって演奏してきたギターデュオ・レパートリーの拡充にも務めている。そうした活動の一端として、この度、メルベイ社から『ザ・カステラーニ＝アンドリアッチョ・デュオ・コレクション』が出版されることとなった。これは彼らが手掛けたギター二重奏のための演奏会用編曲作品集の第1集であり、他のデュオもそれらを演奏できるように出版譜として共有したいという彼らの希望に拠るものである。表紙にはマイケル・アンドリアッチョが描いた絵画が使用されている。

ジョアン・カステラーニとマイケル・アンドリアッチョは共にイタリア系アメリカ人であり、人々との会話と仕事と食とに情熱を注いでいる。マイケルは素晴らしいワインセラーを所有し、特別なワインとオリーブオイルの組み合わせによる食事を楽しみ、余暇には絵を描いている。

今回、筆者はZOOMを介して二人にインタビューを行なった。彼らの「デュオの遺産」というべき金言の数々を以下に紹介したい。

——（テレーズ・ワシリー・サバ）この度、あなたがたはギターデュオのための編曲作品集を出版されますね。これは素晴らしいニュースで、今まで出版されなかったのが不思議なくらいです。

マイケル・アンドリアッチョ：はい、私たちは何十年もこ



これらのレパートリーでツアーを行なってきました。多くは1970年代後半から1980年代前半にかけて編曲したのですが、当時の我々は多忙を極めており出版の準備をする時間がなかったのです。現在は演奏活動からはほぼ引退しましたので、ようやく手掛けることができました。出版譜によって、我々が演奏し、録音したこれらの音楽を、誰もが入手でき、演奏できるようにしたいと願っています。

——編曲はお二人でなさるのでしょうか？例えば、ヘンデルの《調子の良い鍛冶屋》の主題を用いた変奏曲はどのようにされたのですか？

マイケル：編曲は二人で行ないます。鍵盤用作品を2台のギターに編曲する場合、ピアノの右手をギター1に、左手をギター2に振り分けることが多いと思いますが、我々はギターデュオを2本別々のギターではなく、1つの楽器として捉えています。今回出版する作品には素晴らしい対話の瞬間が数多くありますが、それらを組み合わせることで、2本のギターを1つの大きな美しい楽器として聴かせることができるのです。

——メロディーと伴奏ではなく、2人のギタリストの対話に重点が置かれているのですね。ピアノからギターデュオに編曲する際に、原曲には手を加えましたか？

マイケル：可能な限り原曲に忠実にしています。楽器の制約で音楽的な結果が得られない場合にだけ手を加えました。ただ装飾については、かなり自由に加えています。装飾の多くは我々によるオリジナルです。

ジョアン・カステラーニ：《調子の良い鍛冶屋》では、最終変奏でスケールのパッセージが繰り返されますが、それを一方だけが受け持つのではなく、フレーズの繰り返しごとに交替するように編曲しています。デュオとしての対話が成立するようなバランスを心がけました。

——2つのギターが会話するように演奏されるのは聴いても非常に心地良いですね。ヘンデルには傑作が多いですが、この曲集に含まれている《シャコンヌ》は私も大好きな作品です。この曲を編曲しようと思ったきっかけは？

マイケル：プレスティ&ラゴヤの古い録音を聴いたことがきっかけでした。もちろん彼らの演奏から着想を得たものもあるのですが、そこから我々が対話のようにこの曲を演奏することによって、いろいろなアイデアが次々と生まれて発展していったのです。

——イダ・プレスティは1967年に亡くなっています。あなた方がデュオを始めたのは1970年代なので、プレスティ&ラゴヤのアメリカ公演を実際には聴いていらっしゃらないですよね？

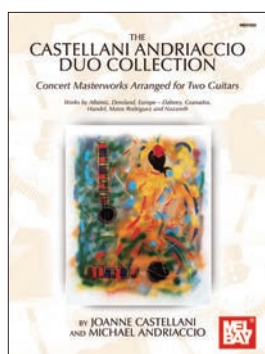
マイケル：はい、残念ながらプレスティ&ラゴヤの生演奏を聴くことはできませんでした。我々が実

際に聴くことができたのはジュリアン・ブリームとジョン・ウィリアムスのデュオ演奏です。1973年3月にニューヨークのタウンホールで行なわれたデュオとしてのデビューコンサートでした。我々は最前列の中央の席で彼らの演奏を聴きました。ジュリアンとジョンがアルバム『世紀のギターデュオ』に収録した、ファリャ〈スペイン舞曲第1番〉、カルツリ〈対話風小二重奏曲 Op.34-2〉、ソル〈アンクラージュマン〉、アルベニス〈コルドバ〉、グラナドス〈ゴイエスカスの間奏曲〉などが演奏されたことを現在でも鮮明に覚えています。

ジョアン：あの公演では各々のソロ演奏もありましたよ。ジュリアンがウォルトン《5つのバガテル》、ジョンがバッハ《プレリュード、フーガとアレグロ BWV998》を弾きました。もちろん私たちは畏敬の念を抱きましたよ。ジョン・ウィリアムスは非常にストイックですべてが整然としていて完璧でした。そして、ジュリアン・ブリームの演奏はまったく正反対でした。信じられないような色彩感覚に溢れており、ギターとは思えないほどの素晴らしいオーケストレーション、その発想の豊かさには、ただただ驚かされるばかりでした。

——そのお話は二人の演奏家としての違いが顕著でとても興味深いですね。あなた方がデュオを組もうと思ったきっかけは何ですか？同じ先生に習ったということですが？

マイケル：学生時代の我々は共通の教授を通してお互いを意識し、比較し合っていました。間接的な競争相手だったのです。同じレパートリーを弾いていたこともあって、やがて親しくなり、それが発展していったのです。当時のニューヨーク州立大学バッファロー校音楽学部では、クリーブランド弦楽四重奏団のメンバーや伝説のブダペスト弦楽四重奏団のチェリストであるミッシェル・シュナイダーが教鞭を執っていたこともあり、室内楽教育に力を入れていました。素晴らしい弦楽器奏者たちと一緒に演奏していたんです。それもあってジョアンとデュオを組むことにしました。直後にトロントで開催された、「ギター75」フェスティバルが、我々がデュオで参加した最初の大きな国際ギターフェスティバルでした。そこではギルバート・

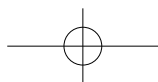


カステラーニ=アンドリアッチョ・デュオ・コレクション

【収録曲】

- ジョン・ラングトン卿のパヴァン (ダウランド)
- 『調子の良い鍛冶屋』の主題による変奏曲 (ヘンデル)
- シャコンヌ・ト短調 (ヘンデル)
- ラ・クンパルシータ (ロドリゲス)
- キャッスル・イノベーション・タンゴ (ヨーロッパ&ダベニー)
- エスコレガンド (ナザレー)
- スペイン舞曲第2番「オリエンタル」(グラナドス)
- エル・プエルト (アルベニス)

メルベ社より刊行



ホワイトハウスにて



トリオ・ファレッタ（左より）マイケル・アンドリアッチョ、ジョアン・ファレッタ（指揮者、パッファロー・フィル音楽監督）、ジョアン・カステラーニ（ジョアン・ファレッタ国際ギター協奏曲コンクールにて）

ビベリアンや、オスカー・ギリア、伊藤亜子&アンリ・ドリニーのマスタークラスでも演奏しましたが、誰もが「君たちはデュオを続けるべきだ」と言ってくれたのです。

ジョアン：私たちの大学はギター室内楽にも熱心で、デュオでも学位が取得できるカリキュラムを組んでくれましたし、教授からも「デュオを続けなさい」と言われました。皆が後押しをしてくれたのですね。

——デュオを始めた当初はどんな曲を弾いていましたか？

ジョアン：プレスティ&ラゴヤやジュリアン&ジョンのレパートリーでした。当時はギター二重奏曲といえば《アンタラージュマン》やカルッリの曲に限られていて、レパートリーを探すのが本当に大変だったんです。

マイケル：我々が一番最初に取り組んだ曲はプレスティ&ラゴヤが録音していた19世紀前半のスペインの作曲家ホセ・ガレスの〈ソナタ〉でしたが、その楽譜を手に入れることができなかつたのです。そこで鍵盤用楽譜から自分たちで編曲することにしました。その編曲譜は幸運にもオックスフォード大学出版から出版することができました。「この楽譜を出版して欲しい」と手紙を書いて、その返事を待つというのんびりとした時代でしたが、彼らは「イエス」と言ってくれたのです。それが我々の2本のギターのための最初の編曲作品でした。

——その後も出版は続けられたのでしょうか？

マイケル：いいえ、我々は出版社へのアプローチに積極的ではありませんでした。コンサートのために必要なレパートリーの編曲はたくさん行なっていましたが、演奏と録音に忙しく、出版にまでは手が回らなかったのです。

——そうすると、1970年代から現在に至るまでの、実に

50年分もの編曲が存在するわけですね？

ジョアン：それを今、私たちは行なっているというわけです。以前にマターニャ・オフィーの求めに応じて、19世紀クロアチアの作曲家ヨハン（イヴァン）・パドヴェッツの《「ヴェニス」の謝肉祭》による演奏会用変奏曲を編曲して出版したことはありました。他にはセザール・フランクの《前奏曲、フーガと変奏曲》の編曲や、ハイドン作品をフランソワ・ド・フォッサが編曲した《グラン・デュオ》もオフィーのために再編曲を行ないました。

マイケル：スピト音楽出版から刊行されたロベルト・シエラのデュオ協奏曲や、ロンドン交響楽団と共演したソロギターのための協奏曲、ビル・ホラブ音楽出版から出版されたマイケル・コリーナの《ゴイエスカーナ》など、我々が委嘱した曲もありますよ。

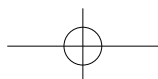
ジョアン：私たちは、他のギタリストの出版物を手伝ったりすることはありましたが、基本的にはコンサート用レパートリーとして編曲を行なうことが多く、自分たちの編曲が出版されることはほぼありませんでしたね。

——今回メルベイから出版される『ザ・カステラーニ=アンドリアッチョ・デュオ・コレクション』は素敵な選曲ですね。ヘンデルはもちろん、グラナドス、ダウランド、そしてアルゼンチンタンゴもあります。バランスの取れたレパートリーだと思います。この曲集には8曲が収録されていますが、選曲は大変だったのでは？

マイケル：当初は12曲収録の予定でしたが、あまりにも多いので8曲まで絞りました。ヘンデルは煌びやかなト長調の小フーガも編曲したのですが、《シャコンヌ》と《調子の良い鍛冶屋》が長いので、ヘンデルの曲が3曲になると全体のバランスが悪いと考えて外しました。まだ他にももう1冊分くらいは編曲を用意してあります。

——アルベニスやグラナドスの作品は、コンサートで演奏しているうちに元の編曲に手を加えたりもしましたか？

ジョアン：アーティキュレーションなどの新しい発見はありますが、ほとんどの曲は私たちが最初に編曲したもののか



ら、さほど変わってはいません。

——曲集に収録されているタンゴ作品とそれを発見した経緯について教えてください。

マイケル：1979年頃、弦楽器を中心とした室内楽の分野では、ピアノを始めとするタンゴ音楽を取り上げようという機運が高まりました。私はそうした音楽を愛聴していたのですが、ジョアンに「これらの曲をコンサート用に編曲してみないか?」と提案したのです。当時、特にクラシックギターの世界では、まだ誰もタンゴを演奏していませんでした。それで、今回の曲集に収録されている3曲を編曲したのです。ちょうどGFAがロサンゼルスで開催したフラトン・ギターフェスティバルに招聘されたので、これらのタンゴを演奏したところ大好評でした。それ以来、タンゴは我々のレパートリーの柱の一つになったのです。

——エルネスト・ナザレーは有名ですが、その他の作曲家はどうやって見つけたのですか?

ジョアン：ジェームズ・リーズ・ヨーロッパとフォード・ダブニーは偉大なラグタイム・ピアニストで、膨大な数の作品を遺しています。彼らの音楽はニューヨークの演奏会で取り上げられることも多く、そこで私たちは彼らの作品に触れ、名前も知りました。私たちが編曲した〈キャッスル・イノベーション・タンゴ〉は彼らが1914年に書き下ろした作品です。

——ギターデュオの新しいレパートリーになりますね。

ジョアン：実はGFAのフェスティバルでこの曲を演奏することを私は躊躇ったのです。なぜなら、それは凄く危険なことのように思われたので。でもマイケルは演奏しようと強く主張しました。そこで勇気を出して取り上げたのですが、結果としては彼が正しかったわけですね。

マイケル：でも私が正しかったのはその時だけです。GFAでの公演の直後にヨーロッパ・ツアーが予定されていたのですが、主催者にプログラムを送ったら、「こんな曲はプログラムに入れるな!」と即座に突き返されてしまいました(笑)。

ジョアン：当時は伝統的なレパートリーを演奏することが求められていました。演奏会では誰もが同じようなプログラムを組み、とても保守的だったのです。そうした中で〈キャッスル・イノベーション・タンゴ〉のような曲を演奏することはとても勇気が必要だったのですが、アメリカの聴衆は喜んでくれました。実のところ彼らは軽快な親しみやすい楽曲を望んでいたのです。そこで私たちは徐々にプログラムに占める軽音楽の割合を増やしていきました。ところが、そのプログラムをヨーロッパの演奏旅行に持っていったら、すぐに拒絶されてがっかりしたものでした。ヨーロッパではまだバッハやヘンデルなどの伝統的で重厚な音楽が求められており、軽い音楽は蔑視されていました。もう現在ではそうしたことはありませんが、私たちはクラシック音楽の演奏会プログラムに対する考え方が変化していく、過渡期の真っ只中にいたというわけです。

——ヨーロッパ以外ではもっと幅広いレパートリーを演奏することができたのでしょうか?

マイケル：ホワイトハウスでクリントン大統領のために演奏する機会があり、その後、アメリカ国務省から我々は文化大使に任命されました。ブラジル、中国、フィリピンに派遣されたのですが、まるでロックスターのような大歓迎を受けましたね(笑)。ブラジルでは我々の大切な友人であるセルジオ・アブレウと一緒にした。当時は彼が製作したギターを弾いていたのですよ。

——セルジオ・アブレウはギター製作家になる前、1970年代の前半にはアブレウ兄弟としてデュオで活動していたようですが、その後はソロでも活動していますよね?彼の演奏家時代からの知り合いなのですか?

ジョアン：ええ、私たちはセルジオのマスタークラスを受講したことがあり、とても親しくなったんです。彼からC=テデスコ《平均律ギター曲集》の手稿譜をいくつか貰ったこともあります。ギターデュオのレパートリーも教えてくれたし、作曲家のマルロス・ノブレを紹介してくれたり、彼自身の作品も何曲か贈ってくれました。

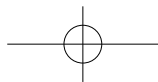
マイケル：デュオでの演奏も聴きましたし、1981年にトロントで行なわれたセルジオの最後のソロ公演にも行きました。彼のソロのキャリアは最初はとても上手くいていたのですが、そのうち演奏には興味を失ってしまって、ギター製作に打ち込むようになったのです。

——アブレウ兄弟の演奏について教えてください。

ジョアン：彼らは驚異的でした。信じられないほどの見事な演奏でした。セルジオとエドゥアルドはコンサートでは各々のソロも披露していましたが、二人の個性が対照的でした。私たちはアリス・アーツの紹介でセルジオと知り合い、その後も良い関係を築くことができたのです。1987年のブラジルツアーではセルジオと共に素敵な時間を過ごし、彼の楽器もいくつか入手しました。彼の工房は実にユニークなんです。アパートの一室にあって、湿度をコントロールするためにビニールで囲いをした部屋がありました。基本的な設備しかないのに、彼はそこで素晴らしい



セルジオ・アブレウと共に



レオ・ブローウェルと

ギターを作り上げたのです。セルジオ・アブレウが理想とする楽器は1952年と1953年のヘルマン・ハウザーなので、彼は常にスブルースを使用しています。ボディはハウザーよりも小ぶりですね。

——セルジオ・アブレウのギターを使う前は、どんなギターを弾いていましたか？

マイケル：フランス系カナダ人の製作家ジャン・クロード・ラリヴェのギターを弾いていました。ロバート・マッティングリーが作った1952年製ハウザーのコピーモデルも2本持っていましたし、アントニオ・マリンとパウリーノ・ベルナベも手に入れ、それからロバート・ラック、デイク・トラファージェンも揃えました。メキシコのガブリエル・エルナンデスのギターも何本か持っていました。主にコンサートで使ったのはラックとトラファージェンです。

——お二人は常に同じ製作家の楽器を使って演奏されるのでしょうか？ ギターデュオは同じ楽器を揃えることが多いのですか？

ジョアン：はい、そうでない時期もありましたが、私たちは基本的には同じ製作家の楽器を2台揃えて使います。セルジオ・アブレウのギターを弾いていた時期が一番長かったのですが、コンサートでは、セルジオのギターを2本、あるいはラックを2本、マッティングリーを2本と、すべて同じ楽器をペアで使うことにしていました。

マイケル：我々とは違って、多くのデュオは各々が違う楽器を用いるようですね。経済的な事情もあるのですが、批判を恐れずに言えば、彼らはソリストとしてのエゴを捨て去ることができないのです。真の意味ではデュオとして機能していないように思います。敢えて名前を伏せますが、自分たちを2人のヴィルトゥオーゾ・ソリストと称する超有名デュオがいました。でもそれは、本来のデュオや室内楽のコンセプトとは決して相容れないものです。

ジョアン：多くのギタリストは、単にデュエットを行なうために「集まっている」だけです。だから彼らが目指しているものは、私たちとは違うんです。私たちのアプローチは弦楽四重奏から強い影響を受けており、クリーブランド

弦楽四重奏団やブダベスト弦楽四重奏団を指標にして発展してきました。ゲアルネリ弦楽四重奏団やジュリアード弦楽四重奏団のマスタークラスも受けましたが、彼らは常にカルテットとしての音の統一感、バランス、トーンを求めており、それが私たちの耳と脳に刻み込まれたアプローチなのです。弦楽四重奏が目指すものがそうであるなら、ギター2本もそうであるべきだと考えています。

マイケル：「デュエット」は2人が一緒に演奏すること。それはそれで良いのですが、「デュオ」はそれ自体が一つのメディアでなくてははいけません。我々はデュオをそう定義づけています。

——あなた方は1996年に自らのレコード会社であるフレウ・デ・ソン・クラシックスを設立して成功を収められましたね。

マイケル：はい、1998年と1999年にはフレウ・デ・ソン・クラシックスからリリースした35タイトルのアルバムが、グラミー賞ノミネートの候補作として挙がりました。2021年にはギタリストのリカルド・サエブのCD『ゼファー』がグラミー賞の3部門にノミネートされたのも非常に嬉しいことでした。

——これからも多くの賞を受賞されるように祈っています。また、メルベいの『カステラーニ=アンドリアッチョ・デュオ・コレクション』の出版を楽しみにしています。

◎カステラーニ=アンドリアッチョ・デュオ/ディスコグラフィ

- ・アニマ・デル・スール：ミロンガとタンゴ/カステラーニ=アンドリアッチョ・デュオ (Fleur de Son: FDS 58020, 2013)
- ・スリー・キャビネッツ・オブ・ワンダー〜マイケル・コリーナ「ゴイエスカーナ」ギターとオーケストラのための協奏曲/マイケル・アンドリアッチョ、アイラ・レヴィン指揮、ロンドン交響楽団 (Fleur de Son, 2010)
- ・デヴェ・セル・アモール〜マイケル・アンドリアッチョ・ブレイズ・クラシック・ボサノバ (Fleur de Son: FDS 57977, 2006)
- ・ジ・アーリー・レコーディングス/カステラーニ=アンドリアッチョ・デュオ (Fleur de Son: FDS 57966, 2004)
- ・2本のギターと弦楽器のための協奏曲/カステラーニ=アンドリアッチョ・デュオ、アリー・リップスキー指揮、イスラエル室内管弦楽団 (Fleur de Son: FDS 57952, 2001)
- ・アメリカン・イディル/ダニエル・マッケイブ (バリトン)、カステラーニ=アンドリアッチョ・デュオ (Fleur de Son: FDS 57924, 1997)
- ・ハイドン〜ド・フォッサ：2本のギターのためのグラン・デュオ/カステラーニ=アンドリアッチョ・デュオ (Fleur de Son: FDS 57922, 1997)
- ・ロベルト・シエラ：協奏曲初演/カステラーニ=アンドリアッチョ・デュオ、ボニータ・ボイド (フルート)、エリック・ラスク (ホルン)、アリー・リップスキー指揮、リトアニア聖クリストファー室内管弦楽団 (Fleur de Son: FDS 57921, 1996)
- ・椰子の木陰で/カステラーニ=アンドリアッチョ・デュオ (Fleur de Son: FDS 57918, 1994)
- ・1685〜栄光の三日間/カステラーニ=アンドリアッチョ・デュオ (Fleur de Son: FDS 57917, 1990)
- ・ダンツァ・アンド・モア/カステラーニ=アンドリアッチョ・デュオ (Fleur de Son: FDS 57916, 1986)
- ・ギターと二人の旅/カステラーニ=アンドリアッチョ・デュオ (Fleur de Son DVD)
- ・ギター・マスターズ・ライヴ/カステラーニ=アンドリアッチョ・デュオ (Mel Bay DVD)